



## 研修医・指導医のための 呼吸器疾患診断 Clinical Pearls

宮城征四郎／藤田次郎 編著

● A5 頁 254 2015

定価：本体 4,200 円＋税

[ISBN 978-4-524-25744-7] 南江堂 刊

最新の医学知識を披露し疾患について語る指導医の姿は男っぷりをあげるのだが、なかでも私が最も心を打たれるのは、ベッドサイドで研修医を教育する姿である。指導医の、病態生理を考えた的確な診察、患者を思いやる優しい振る舞いを見るときはどグッとくる瞬間はない。この本を熟読し、そんな男前の指導医に变身するのはいかがだろうか。

宮城征四郎先生の執筆による「第1章 指導ならびに学びの姿勢」では、研修医の心得や良き指導医となるための12カ条が紹介されている。回診中に挿入するミニレクチャーの実例もあり、指導医にとっては研修医に悟られずにこっそり読みたい部分である。

「胸痛を伴いやすい感染症には肺炎球菌、膿胸、肺膿瘍、胸膜炎、敗血症性塞栓（感染性心内膜炎、Lemierre症候群、薬物乱用）がある」と第2章で述べられている。このように、「胸痛を伴いやすい感染症」というキーワードに着目すると鑑別診断を展開しやすい。

第3章で述べられる、バイタルサインを読み解くための知識も極めて重要だ。急性病態では脈圧 $>(0.5 \times \text{収縮期血圧})$ の高血圧ではカテコラミン放出の病態を考える。脈圧 $<(0.25 \times \text{収縮期血圧})$ の低血圧では心拍出量低下を示している。

「第4章 身体所見のとり方」で解説されている、聴打診法による胸水貯留量の評価は、実臨床で大いに役立つ。本法は客観性が高いため、実際に行うと学生や研修医は感嘆の声をあげて納得する。このようなベッドサイド教育を意識した記述こそ、本書の真髄である。

「第5章 グラム染色」では、気道感染症を起こす微生物のグラム染色と観察で注意すべきポイントが簡潔に述べられていて理解しやすい。綺麗な写真とイラスト、表をふんだんに用いて読者の理解を助ける配慮もこの本の大きな特色であるが、本章でもそれが存分に活かされている。

胸部X線写真と胸部CT読影はすべての医師にとっ

て必須の知識であるが、「第7章 胸部単純X線写真」で述べられている奇静脈食道線を、私は注意して見たことがなかった。側面像の読影を改めて学ぶと、今まで十分思考することなく写真を見ていたことがよくわかり、反省した。また「第8章 胸部CT」では、必要な解剖（特に二次小葉の理解）、限局性肺炎とびまん性肺炎におけるCT読影のプロセスが述べられている。末梢優位な分布を示す疾患として、慢性好酸球性肺炎、特発性器質性肺炎、UIP（通常型間質性肺炎）、DIP（剥離性間質性肺炎）、敗血症性塞栓、肺血栓症を想起できれば、鑑別診断の絞り込みが簡単になる。なるほど。

その他、バイオマーカー、呼吸器内視鏡、血液ガス分析・呼吸機能検査についても、各章で重要点がわかりやすく解説されている。

最後に藤田次郎先生の執筆による「第11章 文献の調べ方・論文の書き方」がある。藤田先生が科学者としての使命を抱き、強い意志で積極的に英文論文の執筆を続けてこられたことがよくわかる。症例報告、原著論文、総説、依頼原稿の執筆における注意点が詳細に記述されている。

本書を読みながら、論語の「子曰く、学ばずして思わざれば則ち罔し（くらし）、思いて学ばざれば則ち殆し（あやうし）」の一文を思い出した。知識をたくさん得ても、思考しなければ、どう活用すればよいのかわからない。反対に思考するばかりで知識がなければ、独善的になってしまう。深い知識を得たあとに、それを考えながら活用する。このバランス次第で、医師はより光ることもあれば埋もれもするのである。本書の随所にちりばめられたClinical Pearlsは重要点を的確に示しており、そのために大いに役立つことであろう。

さあ、この本を読んで呼吸器疾患に強いグローバルな指導医を目指そうではないか。